

「展評」

春の美術 春陽会 国画会

春のシーズンの立役者、春陽会と国画会がいよ／＼十二日から上野の美術館に幕をあける。あたかも上野は満開の櫻に山一杯を輝かせてゐる。時期やよし、「美術の春」のクライマックスである。春のリーグ戦と、春の映画と、をどりの春と、これまた春の気分をいやが上にも引立ててくれるセンセイションの一つだ。

第九回春陽会展覧会

落ちついた春陽会

三輪鄰

俺は俺だ、春陽会は春陽会だといふ自信。といつてこの会が何も独善孤高の独りよがりであるといふ意味ではない。はたの雑音や岡目の八目に気をかけず、もしくは気をかけないですむ、幸福な画境を各々が展開してゐるのが、世にも羨ましい風景のやうに見える。

重ねていふが、これは反語ではない。悠々として迫らず、どつしり落付いてゐるのが、凡そ焦燥と困憊、周囲に気兼ねしい／＼の中途半端の仕事より、他目に見よいことはいふまでもない。しかし或ひは、さういふ「境地」は既に今日においては一般的な画壇の形勢ではないといひ得るかも知れない。兎に角何時かは「野党」であつた姿は、今日の春陽会のものでないこ

とだけは肯かねばならない。

× × ×

画面の質の水準は、しかしこの会辺りになると確かに上つてゐる。その意味は幼稚な画が少くて、第一室に入つて見た感じからが大人びてゐるのに見えることである。ひとところのやうに無理に自分を老成させて、境地的な味の仕事に陥つてゐた傾向の減つた最近の壁面においても、なほ且このことは認められる。澁刺たる清新さを感じずることは難いが、静かな好品を味はふことは出来よう。

去年辺り特に目立つてゐた傾向、この会生え抜きの会員の東洋趣味の画面と、フランス帰りの小山敬三、裕伊之助等の代表する油画の本格的画面との対立も、今年辺りは、落付いて自分自身の画業に晏居してゐる一色に蔽はれて、その影を薄めてゐるかの感が深い。

× × ×

落付いてゐる第一は小杉未醒氏である。《寒山子》の墨色には泌々と「未醒」の格と味がにじみ出てゐるし、着彩の《娘》は古典の静けさを現代に生かしてゐる。これを以て昭和の「ミス・ニッポン」とする場合には大衆の投票は如何かと思はれぬでもないが、画として見れば流石に立派な仕事だとなすを憚らない。

木村莊八氏は《牛肉店帳場》と題して氏の生家「いろは」の氏の追想にある或る時期を写してゐる。従つて明治味感の強いもので、謂はばまた氏の最も得意な壇場であるわけだが、一昨年《パンの会》と同じく氏の

ねらつてゐる味を理解出来ない者には、何としても縁遠いものといはねばならない。

手馴れたといへば、足立源一郎氏の山嶽風景は何れも巧たくみなもので、楽々と描いてゐるし、今関啓司氏の諸作また即興的情趣をよく捉へ、倉田白羊氏の北信濃農村風景も例のものながら、その不相変さが不相変すが／＼しいのが快こころよく見られてゐる。

石井鶴三氏の《燈下美人》は氏ならではの描き得ぬ感じの深い境地で、珍しい「静物」のジーンと澄すんだ静かさがまた無類である。

小林徳三郎氏の色彩はまた洪くなつて落付いて来たが、鬼頭壘二郎氏の《海岸の道》と横堀角次郎氏の《柿崎風景》、田中善之助氏の《薔薇》はそれ／＼その画境を深めてゐる好品と見得る。小林和作氏の《林檎》が裝飾風の構図の大作で、東洋花鳥画を油画で行つた大胆な試みに問題を出してゐるのに対して、中川一政氏は全く《烟霞帖》の中に隠れて了つたかに見えてゐる。

× × ×

一方やや派手な登場をしてゐる人々の中で、まづ長谷川昇氏が力作を示してゐる。《レビューの女》はカジノ・フォーリーの無邪気なエロチシズムを取扱つたといふが、その一点からいへば大袈裟であり過ぎるし、色のどぎついのも気になる。しかしその大作を楽に仕上げてゐる筆は容易なものでないことは想像するに難くない。むしろ《ロバと少女》の快い色別の諸調に好意を寄せたい。

林倭衛氏は今年は勉強してゐるが《静浦風景》は色彩のクッキリした対比が快く、氏の南仏に受けた感情をそのまま日本の伊豆に移し植えて落付いたやうな観がある。

林氏と同じ意味でより強い効果を期してゐるのは小山敬三氏である。その《田植》の畔、《風景》の薨、《薄暮漁村》の砂丘の構造的な組み立ては、未だ日本人の誰もが手をつけてゐない所である。去年初めて日本の風物に手をつけた氏の試みは、今年は立派な効果を挙げてゐる。氏の力強い把握力はその確実な筆と伴つて何れも立派な作品といひ得る。

碓伊之助氏はまた《支那壺の花》によつて、その画業の日本化を主張しているかに見える。錦絵の感じを今日に生かして俗に陥らず、《田舎娘》は立派な肖像画である。氏の力強いタブローを見得なかつた遺憾さは、この二点によつて償つぐなひ得てゐるであらう。



碓伊之助《支那壺の花》第9回春陽展出品

× × ×

この外新帰朝の山崎省三、水谷氏の滞欧作品がまた見逃せないものである。水谷氏の作は渡仏前のうるさいマッスの取扱ひ方を飛躍して《ビルフランジュ風景》《町の花屋》などコンポジションと色彩との巧な調和による好品を示してゐるし、山崎氏の作はまた却つて渋くなつたが、その確かな筆で、《スペインのコスチウム》等の力作を出してゐる。氏の《水採り》はスケールの大きいことにおいて、その綽々たる余裕を偲ばしむるものがある。

滞欧中の二氏、長谷川潔氏の繊細な神経による精密な版画と、青山義雄氏の詩的アンチームを持つた画面、殊に《静物》の興味深い制作がまた見逃し得ない。

× × ×

会友及び一般出品中、藤堂奎三郎、長岡忠三郎、坂口右左視、若山為三、久泉共三、国盛義篤、小穴隆一、前川千帆、工藤信太郎諸氏の作品はそれ／＼注目すべきものがある。地味ではあるが健全なその歩み方が特筆されてよいであらう。

なほそれと共に、この会の名物になつてゐる版画室と挿画室さしえしつも見落せない。ことに挿画室における石井鶴三氏の作品と、会員の殆どが挿画に手を染めない人のないことに見られるこの会の人の人事的興味への感心が注意されてよい現象に思へる。

一体批評といふものの習慣によれば、去年の作品との比較に、人と会と

の前進とその反対を見るのであるが、春陽会は一般にそんなことに意を介してゐないやうに見える傾向がある。不相変であることの中に含まれねばならぬ佳さよの意味、良くいへばそれを知つてゐるかの如くである。それを一概に悪いとはいひ得ないことは理解出来る。

しかし批評は前進する、前進し得る、また前進せなければならぬ理由がある。そしてその点からいへば、春陽会のこの一般的傾向は、現はれた結果に拘泥せずにしたところが、なほ物足りない感がしないわけには行かないものがある。画えを見てゐる人の背後に、昨年から今年へかけての急激な世相の変化とその思想的混乱が巖として存在してゐたやうに、春陽会の人々の間にもそのことが同時にあり得たのではなからうか。

ただ単に羨まれるべき風景を展開するだけでよいであらうか？

《週刊朝日》 昭和六年五月

三輪鄰（みわちかし 一九〇五年—没年不詳）

近現代日本美術史に携わる。共著、編著に『藤島武二のことば』『世界の美術』『画室の言葉』などがある。